

太
祇
句
選

太祇句集序

交は易からぬもの也。始は刎頸にして半に寇讎たるの類、古より少からず。太祇はもと江戸の産にて、中年都に上り、住心やよかりけむ、其まゝに廿餘年の春を迎へ、秋風のたつを、さまで尊鱸をも思す。本より山水の癖ありて、みちのくつくしの果迄も杖を引、弱かりしより好る俳諧をもて生涯の樂とす。はた其好るや樂るや尋常にかはりて、行住座臥燕飲病床といへども、日課の句を怠す。まいて誰某が會など云には、一の題に十餘章を並べ、三に五に及るにも此規矩を違ふ事なく、もし趣を得れば上に置下になし、あるは中にもつゞりて、一句を五句にも七句にも造りなし、唯意をうるをもてせ(專)とす。故に其篇什佳境に入もの許多也。又連ね句をなすにも、いつも沉陰する事他に倍せり。こゝをもて何れの巻にも造語連續の率易なるを見ず。惜哉去年の秋文月の半より半身痿るのやまふを感じて、幾程なく葉月上の九日に、折からの草の露と消失ぬ。平生友とせる人あまたなる中に、わきて嵯峨の宛在主人と予と三人雅薙を共にせし事、亦復他に類ふべきにあらず。あるは雨しめやかなる春の夕、はた雪面白き冬の夜など硯にむかひて、おのがじゝ得たると得ざるの自らなるをしらべ合、巨燵に倚居て櫓の上に杯をめぐらし、果ゝはなき跡の事まで語出て、吾儕かうやうに此道に

執深うとどめぬれば、誰にまれながらへ残たらん者、志を一にして草稿を選出、世に残さましかば、生に死に改ざるの交ならんかし。實もさ也やなど、互に契り約せしとも亦幾度にか及けん。されば今雅因とくもに遺草數十卷を閲して、その中より先初稿を編輯して世に廣うせんとす。事成の日雅因亦來會して、一は此功を終るを喜び、一は多からざる心友の缺ぬるを嘆じけるに、予頭を掉て、それもさる事なれど、兄も我も元來二腰を横たふ身ならねば、生前刎頸の交は思懸ず、されど風雅の可否を討論せしより外、さらに市道の交をなさざりしがうへ、契し事のかうなんとみに成ぬるは、易からぬ交のよく終あん也と、祇もまた我等が相倍そむかざるのこゝろを、黃壤の下に眉を開ざらましや。遂に此語をもて序とす。

明和九年壬辰夏五月

洛 嘯 山 書



太祇師年ごろいひ捨をかれしほくの草稿なるもの、
みな我に譲られ侍る。紙魚のためにむなしくせむ事
本意なく、選を葎亭夜半亭の兩匠へまかせ、老師生
涯のあらましまで序跋に述、一冊となして給りぬ。
さるを竹護叟の清書を乞、さくら木にあるとて、今
の不夜庵のあるじ、師の倂をいたづらに書うつし置
れし反古を、あながちに所望して、こゝに彫刻し侍
りぬ。

吞
獅

太祇曾而小言すらく、青丹よしなら漬と云んより、なら茶と云んこそ俳諧のさびしみなれ。蕉遂が五斗はそちにさはがし。蕉翁の三斛こそ長く靜にして鉄杵を鐵に磨し、點滴の石を穿つをしへにも叶て、我業の卒る時もありなむ。かりにもおこたりすさむべからずとて、佛を拜むにもほ句し、神にぬかづくにも發句せり。されば祇が句集の艸稿を打かさね見るに、あなおびたゞし、人のイめる肩ばかりにくらべおぼゆ。げにやいせのはま萩のおきふしにもふんでをはなたず、勃窣として口よりいづるにまかせ書おけるものにしあれど、なにはのあしのいづれ刈すつべきも見へねば、葎亭・宛在の撰者も眼つかれ、こゝろまどひて、まめやかにゑらみ得べうもあらじかし。余二子にいふ、さははつべき期あらめや。大かたにこそあらまほしけれ。たゞ四時のはじめごとに出せる五六紙がほどをゑらみ取て初稿と題し、木にきざみて世にひろうし、二稿三稿といへるものは、年を経てもほゐとぐべきわざなれとすゝめければ、二子もうけひて、かしこうこそ中つれ、さらば其ことを世にことはり聞へよとあるにぞ、やがてしりへにかいつく。

明和壬辰九月

蕪村書

朱雀柳巷
歌酒常酣
叟之雪月
熒不夜菴

肅山題

五雲坊必化寫



不夜菴太祇發句集

春

目を明て聞て居る也四方の春
 鯁喰し我にもあらぬ雑煮哉
 元日の居ごゝろや世にふる墨
 元朝や鼠顔出すものゝ愛
 年玉や利ぬくすりの醫三代
 とし玉や杓子數添ふ草の庵
 げにも春寐過しぬれど初日影
 七草や餘所の聞へもあまり下手
 子を抱て御階を上る御修法哉
 初寅や慾づらあかき山おろし
 春駒や男顔なるおゝなの子
 春駒やよい子育し小屋の者
 萬歳や舞おさめたるしたり顔
 萬歳やめしのふきたつ竈の前

羽つくや用意おかしき立まはり
 はねつくや世ごゝろしらぬ大またげ
 北山やしざりくゝて残る雪
 家遠き大竹はらや残る雪
 梅活て月とも侘んともし影
 虚無僧のあやしく立り塀の梅
 春もやゝ遠目に白しむめの花
 な折をと折てくれけり園の梅
 紅梅の散るやわらべの紙つゝみ

誓願寺

紅梅や大きな彌陀に光さす
 東風吹とかたりもぞ行主と従者
 春風や薙刀持の目八分
 糊おける絹に東風行門邊哉
 投出すやをのれ引得し胴ふぐり
 情なふ蛤乾く餘寒かな

色くゝに谷のこたへる雪解かな
 里の子や髪に結なす春の草
 丸盆に八幡みやげの弓矢かな
 元船の水波うらや蔀の蔭
 花活に二寸短し富貴の莖
 朱を研や蓬萊の野老人間に落
 こゝろゆく極彩色や涅槃像
 ねはむ曾に來てもめてたし嵯峨の纏迦
 引寄て折手をぬける柳かな
 善根に灸居てやる彼岸かな
 起ゝに蒟蒻囃ふ彼岸かな
 川下に網うつ音やおぼろ月
 海の鳴南やおぼろく月
 月更て朧の底の野風哉
 島原へ愛宕もどりやおぼろ月
 欺て行キぬけ寺やおぼろ月
 連翹や黄母衣の衆の屋敷町
 實の爲に枝たはめじな梨の花
 皮ひてし穢多が入江や芦の角

江をわたる漁村の犬や芦の角
野をやくや荒くれ武士の烟草の火
畑うつやいづくはあれど京の土
耕すやむかし右京の土の艶
山葵ありて俗ならしめず辛キ物
春雨のふるきなみだや梓神子
はる雨や芝居みる日も旅姿
春雨や晝間経よむおもひもの

徳門より春雨の句聞ゆ。それに
對す。

春雨やうち身痒がるすまひ取
聲眞似る小者おかしや猫の戀
草をはむ胸安からじ猫の戀
おもひ寐の耳に動くや猫の戀
諫めつゝ繋ぎ居にけり猫の戀
遅き日を膝へ待とる番所かな
春の日や午時も門掃く人心
擬永き日の行方や老の坂
遅き日を見るや眼鏡を懸ながら

長閑さや早き月日を忘れたる
矢橋乗る嬪よむすめよ春の風
春風にてらすや騎射の綾蘭笠
燕來てなき人問ん此彼岸
ゆたくと畝へだて来る雉子かな
雉子追ふて呵られて出る鳥哉
葉隠れの機嫌伺ふ桑子哉
髪結ふて花には行ず蠶時
華稀に老て木高きつゝじ哉
蠶飼ふ女やふるき身だしなみ
小一月つゝじ賣來る女かな
御影供やひとの間よる守敏塚
菜の花やよし野下來る向ふ山
猪垣に餘寒はげしや旅の空
川の香のほのかに東風の渡りけり
東風吹や道行人の面にも
下萌や土の裂目の物の色
やぶ入や琴かき鳴す親の前
出替や朝飯すはる胸ふくれ

親に逢に行出代や老の坂
出替りの疊へおとすなみだかな
春江華月夜

花守のあづかり船や岸の月

きさらぎの頃嵯峨の雅因がいと
なめる家見にまかりけるに、そ
こらいまだ半なり。木の工いど
もきそひはげみぬる其かたはら
に、むしろ説、酒うち吞居たる
に、句を乞れて

大工先あそむで見せつ春日影

又彌生廿日餘行ぬ。元の竹林に
あらず、もとの水にあらず、おか
しう造りなして宛在樓に(?)た
り。

青(?)みけりな槐洗ふ水もありす川

中風めきて手瘡ける春

不自由なる手で候よ花のもと
付まとい内義の沙汰や花ざかり
鞆はこや隣みこそぬ御身躰
ふらこの會釋こぼるゝや高みより

寒食に火くれぬ加茂を行や我
介子推お七がやうになられけむ
うぐひすの聲せで來けり苔の上
うぐひすや聲に來にける子の一間
うぐひすや葉の動く水の笹がくれ
江戸へやるうぐひす鳴や海の上
鶯の目には籠なき高晋かな
人をとにこけ込龜や春の水
行舟に岸根をうつや春の水
堀川や家の下行春の水
穂は枯て接木の臺の芽立けり
接侘ぬ世になき一穗得てしより
奉る花に手ならぬわらびかな
紫の塵やつもりて間屋もの
つみ草や背に負ふ子も手まさぐり
摘草やよそにも見ゆる母娘
來るとはや往來數ある燕かな
あながまと鳥の巢みせぬ菴主哉
落て啼く子に聲かはす雀かな

あながちに木ぶりは言ず桃の花
大船の岩におそるゝ霞かな
ふりむけば灯とぼす關や夕霞
つぎねふの山睦しきかすみかな
田螺みへて風腥し水のうへ
山獨活に木賃の飯の忘れぬ
崖路行寺の背や松の藤
朝風呂はけふの櫻の機嫌哉
したゝかなさくらかたげて夜道かな
座はみなさくら也けり寺の幕
咲出すといなや都はさくら哉
京中の未見ぬ寺や遅櫻
身をやつし御庭みる日や遅櫻
あるじする乳母よ御針よ庭の花
兒つれて花見にまかり帽子哉
ちる花の雪の草鞋や二王門
齒を鳴し句成先立り花の陰

齒をたゞく事三十六、我白樂天
にならふ。

宋屋は杖引ことまめなる叟、み
ちのく西の海邊より近所はさら
也、花に涼に我わたり灯籠の夜
までもらさず。此春身まかりけ
るを猶幻に有心地す。
死れたを留守とおもふや花盛
蛙居て啼やうき藻の上と下
出代や厩は馬にいとまごひ
出代やきのふからいふいとまごひ
養父入の貌けばくし草の宿
やぶ入の寐るやひとりの親の側
商人や干鰯かさねるはたりく
長閑さに無沙汰の神社回りけり
からくりの首尾のわるさよ風巾
落かゝる夕べの鐘やいかのぼり
屋ね低き聲の籠りや茶摘歌
世を宇治の門にも寝るや茶つみ共
桃ありてますく白し雛の殿
華の色や頭の雪もたとえもの
御僧のその手咲たや御身拭

百歲賀

口馴し百や孫子の手毬うた

・太宰府の神池に鵜飼群をなす

飛びむめにもどらぬ雁を拜みけり
陽炎や景清入れし洞の口
墨染のうしろすがたや王生念佛
爐ふさぎや老の機嫌の俄事
春の夜や女を怖す作りごと
節に成る古き訛や傀儡師
山吹や葉に花に葉に花に葉に
腹立て水呑蜂や手水鉢
人とふて蜂もどりけり花の上
聲立て居代る蜂や花の蝶
見初ると目に蝶みる旅路かな
苗代や日あらで又も通る路
御供してあるかせ申汐干哉
女見る春も名残やわたし守
春ふかし伊勢を戻りし一在所
夜歩く春の餘波や芝居者

行春や旅へ出て居る友の數

夏

物がたき老の化粧や衣更
いとをしい瘦子の裾や更衣
綿脱ておます施主有旅の宿
かしこげに着て出て寒き袷哉
行女拾着なすや憎きまで
能答ふわか待や青すだれ
盗れし牡丹に逢り明る年
猫の妻かの生節まがせを取と畢はなは
夜渡る川のめあてや夏木立
甘き香は何の花ぞも夏木立
高麗人の旅の圃や夏木立
子子やてる日に乾く根なし水
景清は地主祭にも七兵衛

吞獅參宮を送る。

餘花もあらむ子に教へ行神路山
西風の若葉をしぼるしなへかな
みじか夜や今朝關守のふくれ面

ある人のもとにて

め(?)かしさ夏書を忍ぶ後。向
青梅のにほひ侘しくもなかりけり
抽てむめ勝けりな寺若衆
青梅や女のすなる飯の菜
傘焼し其日も來けり虎が雨
さみだれの漏て出て行庵かな
つれづれに水風呂たくや五月雨
歸來る夫の咽ぶ蚊やりかな
蚊屋に居て戸をさす腰を響にけり
事よせて暫へさし出す腕かな
蚊屋くぐる今更老が不調法
やさしやな田を植るにも母の側
早乙女や先へ下りたつ年の程
蚊屋くぐる女は髪に罪深し

蕒菜やしるよししける水所

閑 趣

飛螢あれといはむもひとりかな
三布に寐て蚊屋越の蚊に喰れけむ

御即位きのふありて、けふは庭

上の御規式の陈拜し奉るとて、

みなつとひまふのぼるを聞て

蚊屋釣て豊に安し住る民

蚊屋釣や夜學を好む眞ッ裸

蚊の有に跨るふりや稚がほ

蚊遣火のみゆや戸さゝぬ門並び

下手乗せて馬もあそぶや藤の森

妾が家は江の西にあり菰粽

武士の子の眠さも堪る照射かな

月かけて竹植し日のはし居哉

しらで猶餘所に聞なす水雞かな

妾人にくれし夜ほとゝぎす

追もどす坊主が手にも葵かな

葵かけてもどるよそめや駕の内

確の幕にかくるゝ祭かな
低く居て富貴をたもつ牡丹哉

こゝろほど牡丹の攫む日數かな

門へ來し花屋にみせるばたん哉

切る人やうけとる人や燕子花

深山路を出抜てあかし麥の秋

麥秋や馬に出て行馬鹿息子

笋を堀邊(部カ)彌兵衛や年の功

筍のすへ筍や丈あまり

白罌栗や片山里の藤(?)の中

牡丹一輪筒に傾く日數かな

麥打に三女夫並ぶ榮へかな

さつき咲庭や岩根の微ながら

濡ともと幟立けり朝のさま

くらべ馬顔みへぬ迄譽にけり

なぐさめて粽解なり母の前

物に飽くこゝろ耻かし茄子汁

列立て火影行鴨や夜の水

舟梁に細きぬれ身やあら鶉共

いで來たる硯の蠅の一つかみ

ひとくゝる蠅も有けり瓜作り

姫顔に生し立けむ瓜ばたけ

盗人に出合ふ狐や瓜ばたけ

二階から物のいひたや鈴の兒

あふぎける團を腕に敷寐かな

書樂し歌もこし折うちは哉

風呂布のつゝむに餘る團かな

軛ごしに柄から參らすうちはかな

扇とる手へもてなしのうちは哉

貯ともなくて數あるあふぎ哉

雷止んで太平簫ひく涼かな

蠅をうつ音も嚴しや關の人

夜を寐ぬと見ゆる歩みや蝸牛

有侘て這ふて出けむかたつぶり

愈ぬあゆみおそろしかたつぶり

引入て夢見顔也かたつぶり

折あしと角おさめけむ蝸牛

水の中へ錢遣りけらし心太

もとの水にあらぬしかけや心太
蚊屋釣てくるゝ友あり草の庵

偶成

よしはら鳥のよしとおもへば

これも鳴音のあらぎやうくし

氣のゆるむあつさの顔や致仕の君
世の外に身をゆるめぬる暑かな
めでたきも女は髪は暑サ哉
あつき日に水からくりの濁かな
朝寐してをのれ悔しき暑さ哉
病で死ぬ人を感ずる暑哉
色濃くも藍の干上るあつさかな
釣瓶から水呑ひとや道の端
虫ぼしや片山里の松魚節
かこつとある人の許へ
來し跡のつくが浅まし蝸牛
草の戸の草に住蚊も有ときけ
水練の師は敷革のすゞみ哉
空をみてすゞみとる夜や宿直の間

前鬼にも吞せて行や香需散
川狩や夜目にもそれと長刀
あしらひて巻葉添けり瓶の蓮
蓮の香や深くも籠る葉の茂

寄蓮戀

蓮の香の深くつゝみそ君が家

百聞より東寺の蓮贈られて

先いけて返事書也蓮のもと
たつ蟬の聲引放すはづみかな
澤潟や花の數そふ魚の泡
かたびらのそこら縮て畫寐かな
畫顔や夜は水行溝のへり
夕貌やそこら暮るに白き花
夕顔のまといも足らぬ垣根かな
白雨や膳最中の大書院
白雨や戸さしにもどる草の庵
ゆふだちや落馬もふせぐ旗の笠
白雨やこと鎮めたる使者の馬
橋落て人岸にあり夏の月

翠泉と東寺へ蓮見にまかりて醉
中の吟

引寄て蓮の露吸ふ汀かな

秋

すゞしさのめでたかり覺今朝の秋
初秋や障子さす夜とさゝぬよと
七夕や家中大かた妹と居す
月入て闇にもなさず銀河
家づとの京知顔やすまひと
裸身に夜半の鐘や辻相撲
勝遊の旅人あやしや辻角力
引組で猶分別やすまひと
山霧や宮を守護なす法螺の音
さし鯖や袖とおぼしき振あはせ

明はなし寐た夜つもりぬ虫の聲
城内に踏ぬ庭あり轉むし
見かけ行ふもとの宿や高灯籠
夕立の晴行かたや揚灯籠
聲きけば古き男や音頭取
彼後家のうしろにおどる狐かな
末摘のあちら向ひてもおどり哉
番椒疊の上へはかりけり
つる草や莖の先なる秋の風
瘦たるをかなしむ蘭の苦けり

あるかたより蘭を贈らるゝに、

名立事ありて

蘭の香や君がとめ奇楠に若も又

長月の末、召渡訪來りし時

何もなし夫婦訪來し宿の秋
行先に都の塔や秋の空

岩倉にて雨にあひ、金藏寺大徳

の情に一夜の舍り免され、嬉し

と這上りて

竺ぬげば鹿の聞度夜とぞなる

南谷上人の書の額あり。薬師の
實前に二種の草あり。

南無薬師薬の事もきく桔梗

をぐら山のふもとなる湧蓮子の

庵を、卯雲子と共に尋侍るに、

あらざりければ屏にかいつく。

留守の戸の外や露をく物ばかり

此鱧口明せずと足ぬべし

畠から西瓜くれたる庵かな

遺言の酒備へけり魂まつり

懸乞の不機嫌みせそ魂祭

おもへども一向宗やたま祭

魂棚やぼた餅さめる秋の風

たま祭る料理帳有筆の跡

送り火や顔現あふ川むかひ

いなづまや舟幽竈の呼ふ聲

鬼灯や掴み出したる袖の土産

乞ければ刈てこしけり草の花

二里といひ一里ともいふ花野哉

蛸追へば蟹もはしるや芋畠

餓てだに瘦んとすらむ女郎花
其葉さへ細きこゝろや女郎花

鶏頭やはかなきあきを天窓勝

鶏頭やすかと佛に奉る

蜘蛛の団に棒しばりなるとむば哉

静なる水や蜻蛉の尾に打も

萩原に棄て有けり風の神

萩吹や燃る浅間の荒残り

棕鳥百羽命拾ひし羽をと哉

經師何がし、芭蕉畫る扇に賛
れて

裂やすきばせをに裏を打人敷

秋さびしおぼえたる句を皆申す

築をうつ漁翁がうそやことし限

ものゝ葉に魚のまとふや下築

京へのぼりし時

薜に垣ねさへなき住居かな

みどり子に竹筒負せて生身魂

野分して樹々の葉も戸に流れけり

淺川の水も吹散る野分かな
渡し守舟流したる野分哉
片店はさして餅賣野分かな
芋莖さへ門販しやひとの妻
おもはゆく鵜なく也蚊屋の外
畠踏む似せ侍や小鳥狩
身の秋やあつ爛好む胸赤し

いとわき大女に秋来て、柳絮
の才も一葉と散行、蘭蕙の質も
芳しき名のみに歸り來ぬ。道の
くま／＼問よる中に交りて、父
の蘭席によす。

此夕べぬしなき櫛の露や照

花燭を／＼くりて鑒前にさしよす
るは、いさゝか其情を慰するに
あり。

みそなはせ花野もうつる月の中
あさがほに夜も寐ぬ鹽や番太郎
みか月やかたち作りてかつ寂し
三日月の船行かたや西の海

みか月や膝へ影さす舟の中
雨に來て泊とりたる月見かな
狂はしやこゝに月見て亦かしこ
來ると否端居や月のねだり者
名月や君かねてより寢ぬ病
名月や花屋寐てゐる門の松
うかれ來て蚊屋外しけり月の友
後の月庭に化物作りけり
灯の届かぬ庫裏やきり／＼す
雪ふれば鹿のよる戸やきり／＼す
大根も葱もそこらや蕎麥の花
うら枯ていよ／＼赤しからす瓜
萩活て置けり人のさはるまで
石榴喰ふ女かしこうほどきけり
喰すともさくろ興有形かな
菊の香やひとつ葉をかく手先にも
見通しに菊作りけりな問れがほ
菊の香や山路の旅籠奇麗也
旅人やきくの酒くむ晝休み

殘菊や昨日遊にし酒の禮
朝露や菊の節句は町中も
古畑の疇ありながら野菊かな
泊問ふ船の法度や秋の暮
有侘て酒の稽古やあきの暮
おどり人も減し芝居や秋のくれ
ひとり居や足の湯湧す秋のくれ
夕露に蜂道入たる垣根哉
出女の垣間見らるゝきぬた哉
泊居てきぬた打也尼の友
菊の香や花屋が灯むせぶ程
剃て住法師が母のきぬた哉
寐よといふ寢さめの夫や小夜砧
夜あらしに吹細りたるかどし哉
やゝ老て初子育る夜寒かな
旅人や夜寒問合ふねぶた聲
舟曳のふねへ來ていふ夜寒哉
水瓶へ鼠の落し夜さむかな
朝寒や起てしはぶく古ごたち

椽端の濡てわびしやあきの雨
茄子賣揚屋が門やあきの雨
夜に入ば灯のもる壁や蔦かづら
引けば寄蔦や梢のこゝかしこ
町庭のこゝろに足るやうす紅葉
鎮槌に女や颯るうちもみち
空遠く聲あはせ行小鳥哉
露を見る我戸や草の中
青き葉の吹れ残るや綿島
柿賣の旅寢は寒し柿の側
關越て亦柿かぶる袂かな
残る葉と染かはす柿や二ツ三ツ
かぶり缺く柿の澁さや十が十
戀にせし新酒吞けりかづら結
よく飲まば價はとらじことし酒
きりはたりてうさやようさや呉服祭
新米のもたるゝ腹や穀潰し
どうあると先新米にうまし國
芦の穂に沖の早風の餘哉

迷ひ出る道の藪根の照葉かな
藥掘嫂も提てもどりけり
身ひとつをよせる籬や種ふくべ
口を切る瓢や禪のかの刀
此あたり書出し入もふくべ哉
ひとつ家に年あるさまや若烟草
夜の香や烟草寐せ置庭の隅
事繁く白ふむ軒やかけたばこ
小山田の水落す日やしたりがほ
永き夜を半分酒に遣ひけり
あきの夜や自問自答の氣の弱
長き夜や夢想さらりと忘れける
寐て起て長き夜にすむひとり哉
永き夜や思ひけし行老の夢
落る日や北に雨もつ暮の秋
長きよや餘所に寢覺し酒の酔
壁つゞる傾城町やくれのあき
塵塚に薙さきぬくれの秋
行秋や抱けば身に添ふ膝頭

夢せし馬の弱りや暮の秋

冬

玄關にて御傘と申時雨哉
うぐひすのしのび歩行や夕時雨
濡にける的矢をしはくしぐれ哉
しぐるゝや筏の棹のさし急ぎ
中窪き徑わび行落葉かな
米搗の所を替る落葉哉
盜人に鐘つく寺や冬木立
冬枯や雀のありく戸樋の中
爐開や世に通たる夫婦合
川澄や落葉の上の水五寸
麥蒔や聲で鴈追ふ片手業
達磨忌や宗旨代々不信心

おどらせぬむすめ連行十夜哉
なまふだや十夜の路のあぶれ者
夜歩行の子に門で逢ふ十夜かな
追く^くに十夜籠りや遣り手迄
あら笑止十夜に落る庵の根太
苔しはしらでゐにけり 歸花
京の水遣ふてうれし冬ごもり
身に添てさび行壁や冬籠
冬ごもり古き揚屋に訊れけり
なき妻の名にあふ下女や冬籠
尻重き業の秤やふゆごもり
僧に子^こを膝もとや冬ごもり
いつまでも女嫌ひぞ冬籠
来て留守といはれし果や冬籠
それく^くの星あらはるゝさむさ哉
紙子着てはるゝ^く來たり寺林
紙子着しをとや夜舟の隅の方
わびしさや旅寐の蒲團敷をよむ
活僧の蒲團をたゝむ魔風哉

足が出て夢も短かき蒲團かな
旅の身に添や鋪寐の裾ぶとん
夜明ぬとふとん剝けり旅の友
人ごゝる幾度河豚を洗ひけむ
死ぬやうにひとは言也ふぐと汁
鯢喰ふて酒吞下戸のおもひかな
鯢賣に喰ふべき顔とみられけり
河豚喰し人の寐言の念佛かな
意趣のある狐見廻す枯野かな

不夜庵に芭蕉翁を祭る。

辨越の枯野やけふの魂祭
行てこゝろ後るゝかれ野かな
行馬の人を身にする枯野かな
分稻一周の忌となりぬ。此叟の
すゝめにて、大原野吟行せし往
事を思ひて
なつかしや枯野にひとり立心
鼠喰ふ蒿のゐにけり 枯柳
目にぞしむ頭巾着て寐る父が貌

新尼の頭巾おかしや家の内
頭巾をく袂や老のひが覺へ
法舂をみせて又若る頭巾かな

庚寅冬十月、赤例の一七日禁足
して俳諧三昧に入に、草の屋せ
ばく、浴も心にまかせねば、やう
く^くかゝり湯いとなむに、時雨
さへ降かゝりて、いとど寒きを
銘おしに、吾獨より居風呂わか
して、男どもにさし荷せ來した
り。贈ものゝ珍らしくうれしと、
やがてとび入て、心ゆく迄浴し
つゝかく申侍る。

頭巾脱でいたゞくやこのぬくい物
眼までくる頭巾あぐるや幾寐覺
歸來て夜をねぬ音や池の鶺鴒
草の屋の行灯もとぼす火桶哉
塩鱈や旅はるゝ^くのよこれ面
手へしたむ髪のおぶらや初氷
朝顔の朝にならへりはつ氷
勤行に起別たる湯婆かな

茶の花や風寒き野の葉の園

口切や花月さそふて大天狗

口きりやこゝろひそかに掣ヒキミ

菊好や切らで枯行花の數

ちどり啼曉もどる女かな

爐に銚子かけて酒あたゝむる自

在の竹に、鬼女の面かけたるを、

人の仰もちき居る圖に賛をせよと、

田福より頼れて

吹きやす胸はしり火や卵酒

鴨の毛を捨るも元の流かな

洞切にしもせざりける海鼠ねずみかな

海鼠ねずみだゝみや有し形を忘れ顔

身を守る尖ともみへぬ海鼠ねずみ哉

うぐひすや月日覺へる親の側

大食のむかしがたりや鯽うなぎの前

剛の座は鯽大ばえに見へにけり

立波に足みせて行ちどりかな

莖漬や妻なく住を問ふおゝな

草の庵童子は炭を蔵く也

水仙や胞衣を出たる花の數

膳の時はづす遊女や納豆汁

曲輪にも納豆の匂ふ齋さい日哉

僧と居て古び行氣や納豆汁

御命講の華のあるじや女形

人の來て言ねばしらぬ猪子かみこ哉

喜介を江戸へ下せしあくる日

初雪や旅へ遣たる従者が跡

はつ雪や酒の意趣ある人の妹

木がらしの箱根に澄や伊豆の海

陰陽師歩にとられ行冬至哉

野ゝ中に土御門家や冬至の日

雨水も赤くさび行冬田かな

たのみなき若草生ふる冬田哉

木がらしや柴負ふ老が後より

今更にわたせる霜や藤の棚

腰かける舟梁の霜や野ゝわたし

聴きこの起けり霜のかすり聲

筈ぶねの霜や寐覺の鼻の先

行舟にこぼるゝ霜や蘆の音

耻かしやあたりゆがめし置火燵

埋火に猫背あらはれ玉ひけり

埋火にとめれば留る我が友

あでやかにふりし女や敷巨燵

火を運ぶ旅の巨燵や夕嵐

淀舟やこたつの下の水の音

草の戸や巨燵の中も風の行

攝待へよらで過けり鉢たゝき

曉の一文錢やはちたゝき

はげしさや鳥もがれたる鷹の聲

鷹の眼や鳥によせ行袖がくれ

雪やつむ障子の紙の音更ぬ

小盃雪に埋てかくしけり

汲公と律亭に宿して、そのあし

た道にて別るとて

見返るやいまは互に雪の人

宿とりて山路の雪吹覗けり

空附の竹も庇も雪吹かな
うつくしき日和になりぬ雪のうへ
降遂ぬ雪におかしや簀と笠
御次男は馬が上手で雪見かな
足つめたし目におもしろし手にかゝん
里へ出る鹿の背高し雪明り
長橋の行先かくす雪吹かな
交りは藪の空に入にけり
寒垢離の耳の水ふる勢かな
寒月や我ひとり行橋の音
寒月の門へ火の飛^フ鍛冶屋哉
寒月や留守頼れし奥の院
駕を出て寒月高し己が門
鍋捨る師走の隅やくすり喰
日頃経て旨き顔なり藥ぐひ
枯草に立^テは落る圍(?)かな
氷つく蘆分舟や寺の門
御手洗も御燈も氷る嵐かな
垣より若き小草や冬の雨

父と子よき楢くべしうれし顔
勤行に腕の胼やうす衣

几圭、師走廿三日の夜死せり。

節分の夜明なりければ

死ぬとしもひとつ取たよ筆の跡

梅幸へ言遣る。

積物や我つむ年をかほ見せに
大名に酒の友あり年忘れ
夢殿の戸へなさはりそ煤拂
聲立る池の家鴨やすゝ拂
煤を掃く音せまり來ぬ市の中
刺こかす若衆のもめや年の暮
禪に二百くゝるや厄おとし
すゝ掃の埃かつぐや奈良の鹿
怖す也年暮るよとうしろから
年とるもわかきはおかし妹が許
實ぶね譯の聞へぬ寐言かな
聲よきも頼もし氣也厄拂
年とりて内裏を出るや小挑灯

谷越に賣かけ合ふや年木樵
兼てよく貌見られけむ衣配
唐へ行屏風も畫やとしの暮

雅因を訪ふ

年の暮嵯峨の近道習ひけり

年内立春

歳のうちの春やいざよふ月の前

書林京

室町中立賣上^ル

平野屋
善兵衛

太祇句選

後編

不夜庵太祇句集を撰して序を夜半翁にもとむ。翁曰、序はかりそめにすべからず。祇と因ミの深きものをよしとす。これを葎亭宛在に歸せよ。退て葎亭宛在の二翁にはかる。二翁曰、序はかりそめにすべからず。祇と因ミの深きものをよしとす。これを吞獅に歸す。退て序つくる。意匠万端、つゐに章をなさず。ひそかに思ふ、序のと既前集に盡たり。今はた何をかいはん。たゞちに三翁の言をもて序とす。

不夜城

吞獅

春

小書院のこの夕ぐれや福壽草
 二日には筈のさきやふく壽草
 七くさや兄弟の子の起そろひ
 初寅や頼光しばし市原野
 鉢の子に粥たく庵も若かな
 あら手きて羽子つき上し軒端かな
 萬歳のゑぼし姿やわたりし船
 穴一の筋引すてつ梅が下
 若くさや四角に切し芝の色
 若草ややがて田になるやすめ畑
 旅立の東風に吹する火繩かな
 駕に居て東風に向ふやふところ手
 紅梅や公家町こして日枝山
 嚙れしと思ひもすてず猫の聲
 白魚やきよきにつけてなまぐさき

閑かさを覗く雨夜の柳かな
 嫁入せし娘も多し御忌詣
 はる寒く葱の折ふす畠かな
 白雲や雪解の澤へうつる空
 芹の香や摘あらしたる道の泥
 ぬす人の梅やうかゞふ夜の庵
 うつくしき男もちたる雉子かな
 つみ草や馬のはせきぬ馬場の末
 鶴を盡く雲井の空や雞合
 物音は人にありけりおぼろ月
 歸來て灰にもいねず猫の妻
 髭につく飯さへみへすねこの妻
 漏る雨をひとゝかたるや春の宵
 はる雨や風呂いそがする旅の暮
 水吸に鼠出けり瓶の花
 宵月や船にもさくら打かたげ
 女を供して旅だつ人へつかはす。
 女にかはりて
 枕香の梅をみよとの旅路かな

はる風や殿まちうくる船かざり
 濡れて來し雨をふるふや猫の妻
 挑灯で若鮎を賣る光かな
 拾ひあげて櫻に珠數や御忌の場
 餅やくをおいとま乞のどんど哉
 龍耳に山の名を問ふかすみ哉
 陽炎や板とりて干す池のふね
 踏つけし雪解にけり深山寺
 うぐひすや君こぬ宿の經机
 初午や狐つくねしあまり土
 はつ午やもの間初る一の橋
 おそろしの掛物釘やねはん像
 ちるなどゝみへぬ若さやはつ櫻
 見へ初て夕沙みちぬ蘆の角
 すみの江に高き櫓やおぼろ月
 春寒し泊瀬の廊下の足のうら
 陽炎や筏木かはく岸の上
 かけろふや夜べの網干す川の岸
 涅槃會や禮いひありく十五日

はる雨や音もいろ／＼に初夜のかね
今日は身を船子にまかすかすみかな
若鮎や水さへあれば岩の肩
散てある椿にみやる木の間かな
蝶飛ぶや腹に子ありてねむる猫
うばかゝのさくらを覗く彼岸かな
歸る雁きかぬ夜がちに成にけり
吹はれてまたふる空や春の雪
いろ／＼の名は我言はずさくらかな
情なの苔さくらやひなの前
むかひ居てさくらに明す詞かな
あらし山の花みにまかりて
筏士よ足のとまらぬ花さかり
はる雨や講釋すみて残る顔
三日月に木間出はらふ茶つみ哉
行雁の高きや花につりあはず
地借衆へ一枝づゝやもゝの花
掃あへぬ桃よさくらよ雛の塵
紙びなや立そふべくは袖の上

照り返す伏水のかたやもゝの花
二里程は薦も出て舞ふ汐干哉
勝難の抱く手にあまる力かな
下手の焚くひなの竈ぞ賑はしき
巢を守る燕のはらの白さかな
山吹や腕さし込て折にけり
船よせてさくらぬすむや月夜影
塀ごしやさくら斗の庭の舳
半ば来て雨にぬれいる花見哉
狂言は南無ともいわす王生念佛
暮遅く日の這わたる疊かな
口たゝく夜の往來や花さかり
しなへよく疊へ置や藤の花
遅日の光のせたり沖の浪
八巾持て風尋るや御伽の衆
山路きてむかふ城下や八巾の數
家内して覗のぞからせし接木かな
永日やいまだ泊らぬ鶏の聲
堀川の畠からたつ胡蝶かな

寄添れて眠でもなきこてふかな
ひと眞似のおぼつかなくも接穂哉
泊らばや違き日の照る奥座敷
膝たてゝおそき日みるや天の原
池のふねへ藤こぼるゝや此夕べ
蕨探て筧にあらふひとりかな
八巾白し長閑過ての夕ぐもり
諸聲やうき藻にまとふむら蛙
京へきて息もつきあへず遅さくら
のびよかし藤の苔の咲かで先
寒食や竈をめぐるあぶら虫
はるの行音や夜すがら雨のあし
下戸の子の上戸と生れ春暮ぬ

夏

立むかふ廣間代りや更衣

ほとゝぎす今見し人へ文使ひ
卯の花はまはりこくらの垣根かな
かきつばたやがて田へとる池の水
切るひとの帶とらへけり杜若
湖へ神輿さし出てほとゝぎす
ほとゝぎす江戸のむかしを夢の内
布子賣回國どのよころもがへ

江戸雅光訊来て旨原珠來などが
噂申いでゝ、予が顔の年よらぬ
事、おもひしにたがへるなどゝ
むかしかり出て興じける。

年よらぬ顔ならべたやはつ鯉
など我は寝さめぬ老ぞ時鳥
灌佛や假りに刻し小刀目
新茶煮る曉おきや佛生會
麥秋や埃にがすむ晝の鐘
あまた蚊の血にふくれ居る座禪哉
蠅を打おとや隣もきのふけふ
年よれば疲もおかし更衣
濃く薄く奥ある色や谷若ば

ほり上てあやめ葺けり草の庵
川風に水打ながす晒かな
用意せし拾出す日や晝旅籠
葉ざくらのひと木淋しや堂の前
川留の伊東どのやな虎が雨
あら浪に蠅とまりけり船の腹
麥を打ほこりの先に犂舅
穂にむせぶ咳もさはがしむぎの秋
みじか夜やむりに寐ならふ老心
雨に倦く人もこそあれかきつばた
泥の干る池あたらしや杜若
寐た顔へ軒吹あてるとはし居哉
飲きりし旅の日數や香需散
みじかよ來ると寝に行うき勤
うつす手に光る螢や指のまた
音はして行みづくらき木がくれを
てらすほたるの影もすゞしき 蓮村

螢火や岸にしづまる夜の風
柳みんよそに夕立あまり風

帷子や明の別のすそかろき
蝙蝠や千木みへわかる闇の空
白雨はあなたの空よ鶯の行
みじか夜や雲引残す富士のみね
雨の日は行かれぬ橋やかきつばた
蚊の聲は打も消さぬよ雨の音
一日は物あたらしき五月雨
たけの子や己が葉分に衝のぼる
筍やおもひもかけず宇津の山
底見へて鶺鴒あさまし夜の水
八重雲に朝日のにほふ五月哉
手から手へわたしわづらふ螢かな
若竹や數もなき葉の露の數
ゆふだちの月に成ぬる鶺鴒かな
今朝みれば夜の歩みやかたつむり
さみだれや夜半に貝吹まさり水
筍やほりつゝ行けばぬいた道
早乙女の下りたつあのたこの田哉
旅びとや曾我の里とふ五月雨

みじかよや旅寐のまくら投わたし
古き代を紋に問るゝのぼりかな
織たつ母なん遊女なりけらし
塩魚も庭の雫やさつきあめ
岩角や火繩すり消す苔の花
ぼうふりや蓮の浮葉の露の上
吞獅ツルシまたことしも

旅立を人もうらやむ袷かな
ほとゝぎすきくや汗とる夜着の中
影高き松にのぞむや蝸牛
君めして突せられけりこゝろぶと
かはほりや繪の間みめぐる人の上
蝙蝠やけいせい出る傘の上
わびしげや麥の穂なみにかくれ妻
麥埃アヘ櫛ヘシにくもる門邊かな
思案して旅の袷にうつりけり
側に置いて着ぬ斷や夏羽織
ひるの蚊の顔に鳴り行廣間かな
かやり火のうたてのこるや夜の儘

とりにがす隣の聲や行ほたる
寺からも婆を出されし田植哉
白雨のすは来るおとよ森の上
雨あれて筍をふむ山路かな
隣には木造キヅリのぼる新樹哉
子サナやなまなか澄るくされ水
回國の笈にさし行團かな

竹酔日

草の戸や竹植る日を覺書
物あぶる染どのふかし五月雨
漣ルリにうしろ吹るゝ田植かな
さみだれや夜明見はづす旅の宿
掃流す橋の埃や夏の月
五月雨や川うちわたす簑の裾
角出して這はでやみけり蝸牛
化猫も置手拭やむぎの秋
かたびらの無理な節句や傘の下
松陰に旅人帶とく暑かな
飛石にとかき（蜥蜴）の光る暑かな

松明に雨乞行やよるの嶺
夕立や扇にうけし下り蜘蛛
木枕に耳のさはりて暑き也

向陽軒にて

あつきひや明放す戸のやらんかた
鵜ウぶねみる岸や闇路をたどりく
ゆふ顔のまとひもたらぬ垣根哉
帷子や蠅のつといる袖のうら
かゝる日や今年も一度心太
松かげにみるや扇の道中記
汗とりや弓に肩ぬぐ袖のうち
はや鮓サの蓋とる迄の唱和かな
早鮮に平相國の鱸かな
ひとり言いふて立さる清水哉
關守の背戸口にたつ涼み哉
片道はかはきて白し夏の月
屋根葺は屋根で涼の噂かな
酔ふして一村起ぬ祭かな
虫ぼしのすゞしさかたれ角櫓

むし干や萩(拔カ)身をさます松の風
まし水にあやうき橋を涼かな
鉾處にゆふ風そよく囃子哉
老たりといふや祭の重鎧
まつりの日屏風合の判者かな
花鳥もうら繪はうすき扇かな
酒藏に蠅の聲きく暑かな
かたびらの癖はつきよき腕まくり
涼風に角力とらふよ草の上
土照りを裂るや草の生ひながら
むし干やむかしの旅のはさみ箱
水打て露こしらへる門邊哉
草の戸や疊かへたる夏被

秋

眼さましにみる背戸ながら今朝の露

木戸しめて明る夜惜むおどり哉
船よせて見れば柳のちる日かな
たま祭持佛に残す阿彌陀かな
駕に居て挑灯もつやはつ嵐
君こねばあぶら灯うすし初嵐
めでたくも作り出けり芋の丈
浦風に蟹もきにけり芋畠
初戀や燈籠によする顔と顔
よひやみや門に稚き踊聲
狼のまつりか狂ふ牧の駒
はつ秋や團扇の風をひいた人
手習子^{てりこ}やの門うつ子あり朝さむみ
夕されや軒の烟草に野分ふく
朝さむく蠅のわたるや竈の松
刀豆やのたりと下る花まちり
夜の間の露ゆりすふる廣葉哉
吹倒す起す吹るゝ案山子かな
片足は踏とゞまるやきりくす
初鴈や遊女にあぶらさゝせけり

はつ鴈や夜は目の行ものゝ隅
さはがしき露の栖やくつわ虫
脱すてゝ角力になりぬ草の上
着物のうせてわめくや辻角力
鬼灯や物うちかこつ口のうち
はつ雁やこゝろつもの下り所
かけ稻や大門ふかき並木松
鉢の子にへたつ粥や今年米
里の燈をちからによれば灯籠哉
立寄ば椎はふりきぬ雨舎
猪の庭ふみ音や木の實ふる
待宵やくるゝにはやき家の奥
手折てははなはだ長し女郎花
蚊のありつなかりつ月の船路哉
呵^{しも}程鮎さきへ出たき月み哉
あさ貌や小詰役者のひとり起
稻妻の無き日は空のなつかしき
いなづまのこもりてみゆれ草の原
いなづまやなきとおもへば雲間より

いなづまやよわり／＼て雲の果
芋むしはいものそよぎにみへにけり
もるゝ香や蘭も覆の紙一重
芋の露野守の鏡何ならん
降れても行や月見の泊客
いなづまや雨雲わかるやみのそら
あと追ふてわめきくる也橋の月
名月や船なき磯の岩づたひ
日は竹に落て人なし小鳥網
聞はづす聲につゞくや鹿の聲
名月の晝迄大工遣ひかな
くさの戸の用意おかしや菊の酒
朝市や通かゝりてけふの菊
ひとり居やおもひもふけし十三夜
田舎から柿くれにけり十三夜
十三夜月はみるやとなりから
表から出汐告来つ十三夜
おもはずもよそに更しぬ十三夜
朝市や虫まだ聲すものゝ下

あさ寒や旅の宿たつ人の聲
打やまぬ碓たのもし夜の旅
枝裂てしろりと明る野分哉
よる浪やたつとしもなき鳴一ッ
白き花のこぼれてもあり番椒
中入に見まふ和尚や茸がり
うかれ女や言葉のはしに後の月
一葉さへかさなりやすき日數かな
家々や銚子のきくの咲さかぬ
しづめたるきくの節句の匂ひ哉
臺灣を當推量や十三夜
いく浦のきぬたや聞てかゝり船
馴て出る鼠のつらや小夜ぎぬた
庭のもみちの染たるとて、魯庸
もちきたりける。
やゝあつて水に生たるもみち哉

哲哉、巻を袖にし来て引墨を乞
ついで、菊をおくりけるに、哲
哉もときくを愛ひつくり得しが、
今は平常のきくのみ愛すなどゝ

かたり出たるに、予も同意なる
よし答て

中菊や地に這ふばかり閑なる
曉の籠をぬけけんむしの聲
寒きとて寝る人もあり暮の秋
氣のつかぬ隣顔や暮の秋
鶏頭やひとつはそだつこぼれ種

冬

水仙を生しや葉先枯る迄
木戸しまる背やあら井の夕千鳥
水仙や壘の上に横たをし
よるみゆる寺のたき火や冬木立
一番は逃て跡なし鯨突
宵やみのすぐれてくらし冬の雨
十月の笹の葉青し肴籠
つめたさに箸捨けり松の下

人顔も旅の晝間や神無月
かみ無月旅なつかしき日ざし哉
御築地に見こす山邊やいく時雨
ひとの子の惡處戻りや門の霜
千人の日用そろふや雪明り
人去て曉くらき十夜かな
とする間に水にかくれつ初氷

千本をもどる。

霜をける晶の冴へや鍬の音
下戸ひとり酒に迷たる火燧哉
木葉散雨うちはれて夜明たり
人疎し落葉のくぼむ森の道
本がらしや手にみへ初る老が鍬
木枯や大津脚絆の店ざらし
ぬれいろをこがらし吹や水車
晝になつて亥子と知りぬ重の内
炭賣よ手なら顔なら夕まぐれ
たそがれに吹おこす炭の明り哉
頼に飯とられたる網代かな

水指のうつぶけてある寒かな
花もなき水仙埋む落ばかな
起うきを起出て冬のいさみ哉
飯喰ふて隙にしてみる冬至哉
掃けるが終には掃す落葉かな
壁までが板であられの山居哉
鳴ながら狐火ともす寒かな
初霜やさすが都の竹筴
はつ雪や町に居あはす桑門
初ゆきや酒の意趣ある人の妹
末摘や炭吹おこす鼻の先
はつ雪や醫師に酒出す奥座敷
醫師へ行子の美しき頭巾かな
盃を持って出けり雪の中
ゆきをみる人さわがしや夜の門
犬にうつ石の扱なし冬の月
かさの雪たがひに杖で打はらひ
よるのゆき寐よともいわぬ主哉
口切のとまり客あり峯の坊

寒ぎくや垣根つゞきの庵の數

一とせ翁をゆめみ侍をおもひよ

せて

其魂の朱雀もめぐる枯野哉

今朝は先消てみするや初氷

冬の朝ひのあはれなりけりと

はせを翁の句をおもひよりて

身をよする冬の朝日の草のいほ

藤棚のうへからぬける落ばかな

水せんや幸あたり草もなき

くらがりの柄杓にさはる氷かな

さむき夜や探れば窪き老が肩

水仙や莖みじかくと己が閑

腰かくる舟梁の霜や野のわたし

顔みぜの難波のよるは夢なれや

寒聲や親かたどのゝまくらもと

寒菊や茂る葉末のはだれ雪

苞にする十の命や寒雞卵

親も子も酔へばねる氣よ卵酒

腰かけて紅葉みつらん炭依

かれ蘆や鴨見なくせし鷹の聲
驚に藪の掛菜のにほひかな
木葉ちる風や戸をさす竈の前
あるほどの水を入江の氷かな
關守へ膳おくり來つゝあづす講
句を煉て腸うごく霜よかな
枯くさの藪根の椿落る迄
雪見とて出るや武士の馬に鞍
ゆふ風や木咲といふて梅持參
獵人の鉄砲うつや雪の中
うまきとはいつはりがまし藥喰
稚子の寐て物とふや藥ぐひ
手燈しの低き明りやくすり喰
盃になるもの多し卯酒
魚ぬすむ狐のぞくや網代守
髪おきやちと寒くとも肩車
町中のあらさはがしひとの顔
かみ置やかゝへ相撲の肩の上
髪おきやうしろ姿もみせ歩く

それとみる松の戸尻や莖の桶
顔みせや狀を出しあふ宇津の山
嫁みせに出て來る茶やの落ば哉
對にしてかぞへて歩く鴛見哉
霜の聲ひとの舂で寐ぬよ哉
咲ている梅にもあふや寒念佛
冬ごもる心の松の戸をほそめ
かたちして孤屋までぞ水の色
節季いややむときはやむ物の聲
狐なく霜夜にいづこ煤はらひ
樓に歌舞妓の眞似や煤拂
としぐや煤よう掃て手向水
道ばたの天秤棒や大根引
組板に這ふかとみゆる海鼠かな
餅つきやものゝ答へる深山寺
とし忘扱もひとには精進日
餅の粉の家に白きゆふべかな
二階から土器投やすゝはらひ
居風呂の底ふみぬくや年の暮

わびしさや思ひたつ日を煤拂
すゝ拂てそろりとひらく持佛哉
すゝはきの中へ使やひねり文
煤拂のあら湯へ入る座頭かな
すゝはきや挑灯しらむ門の霜
山ぶきのいわぬ色あり衣配
とにかくにたらぬ日數や年忘
眼に残る親の若さよ年の暮
年とるや帆柱の數ありそうみ

安永丁酉秋八月

不夜庵

五雲撰